



尾形光琳・乾山 滝井権一 中村芳中

加山又造など 四角を越え その星の

命脈は生きつづける。

その星の輝きの影を 追及するの

てはやく 自ら 己の星を自由に 追及する

といふもまた

四百年の歴史は 今尚表現者達の

中に生きつづける。

おもしろい けしあや七十年にすぎ

かみゆから 衣巻を通し 日石の文化に

ふりかえり

光陰をいしめ 鶴舞を 清水とは

度々あつたか、

鷹岸の道標は ともに いく思ふと

正に向かひて来た。

おもしろい 林派 四〇〇年といふ大い

な ふうあに 現美とつた。

鷹岸小学校のす。

まうに 光陰は ときの中だ。

光陰草也 源光院にも近い

河野之昭氏の 碑文に ころ 書かす

↑

比後とて 昔の石版に ありとあり人

くらも 書かすへし。

(書典 本所行状記)

碑文に碑毫 して 吉川甚仙氏の書

も書かす

里山の縁が 村に

光陰

六月八日 洛北鷹峯に 新しい ランドマークが出来た。琳派四〇〇年の 記念碑だ。

琳派の美の様式に関しては、芸術家はともかく、きものファンにも 正倉院もようととも に 愛されて来た文様だ。

風神雷神・秋草文様・平安絵巻などおそらく一枚は 持っている だろう。

その時代の流行にまどわされることなく 年令や趣味をこえて、琳派のきものは 日本人の衣生活の中に生き つづけている。

元和元年(一六一五年)本阿弥光悦は 徳川家康(一五五八年―一六三七年)から鷹峯に土地を拝領した。

大芸術家、本阿弥光悦のまわりには 光悦の一門をはじめ あらゆる 技術の職人達が集まって来て数々の 作品を 生み出してゆく。

染・織・糸・陶器・竹・塗 など

光悦村集団は やがて 独特の集落を形成してゆくようになる。琳派・光悦村・芸術の地から数々の名品が 生まれた。

尾形光琳・乾山、酒井抱一、中村芳中、加山又造など 四百年を越えて その美の命脈は 生きつづけてい る。

それぞれの作家の個性を 追及するのではなく 自然の中の美を自由に 追及するといものだ。

四百年の美意識は、今尚 表現者達の中に生きている。

私も仕事を はじめて七十年になり、ささやかながら 衣裳を通して 日本の文化にふれて来た。

光悦寺をはじめ 鷹峯を 訪れることは度々あったが、

鷹峯の道標は どこに という思いを長い間描いていた。

私の思いは 琳派四〇〇年という 大きな ふしめに 現実となった。

鷹峯小学校の前。

まさに 光悦村のどまん中だ。

光悦寺や 源光院にも近い 河野元昭(こうのもとあき)氏の 碑文に こう書いてある。

「此後(こののち)とても昔の名作におとらぬ名人いくらかも出申(いでもう)すべし」

(出典:本阿弥行状記)

碑文に揮毫して下さった 吉川蕉仙(よしかわしょうせん)氏の書も素晴らしい。

里山の緑が美しい村だ。

※「琳派400年記念碑」は、市田ひろみさんの寄附を活用し、京都市が建立しました。

※河野元昭氏…静嘉堂文庫美術館館長、元琳派400年記念祭委員会呼びかけ人

※吉川蕉仙氏…日本書芸院名誉顧問